宋祁と古文

湯浅陽子

【要旨】

『新唐書』の編修者として知られる北宋の宋祁（九九八～一〇六一）の場合を例として、詩文や筆記等の資料から、その文学観、特に古文や唐代文学の受容の様相を中心に検討し、彼を含んだ北宋仁宗期における文学のあり方の一側面について考える。

『新唐書』の編修は、古文復興という大きな流れとも関わっていたと思われるが、また宋祁自身にも、文章修行のためのよい機会を与えることにもなったらしく、彼は、『新唐書』の編修に従事した十年余りの間に数多くの文章を読んで熟考することにより、あらためて文章を書くことの難しさを痛感し、さらに自分が五十歳以前に書いた他人を模倣するばかりの文章を恥じて、文体の個性の重要性に気づいたと述べている。さらに宋祁が文章の独創性を重視するのは、自己の文章制作についてだけではなく、過去の作者による既存の文章を批評する場合にも共通しており、その際、とりわけ独創性の高い文章の作者として、韓愈に高い評価が与えられている。また宋祁及び彼と同時代に活動し、彼の身近にいた人物でもあり、かつ当時における古文復興の代表的な人物でもある歐陽脩は、彼らの古文制作において、韓愈以来の道統の継承としての意義を意識しつつも、むしろ、それまでの諸家をふまえつつ、それらを止揚した独創的な「自立之言」「一家之言」を生み出すことを強調し、宋祁に近似する態度をとっている。韓愈らによる復興の後、一旦は廃れた古文は、この北宋期に歐陽脩らによって再び復興されたが、それは「古」や唐代の古文を単純に模倣しようとするものではなく、「古」からの儒教的理想の継承を前提としつつも、その文章表現においては、より自由な個性を発揮することを志向し、それはさらに次代以降の人々によって継承され、豊かな実りを生み出していったと思われる。

はじめに

後世においては、北宋の宋祁（九九八～一〇六一）という人物について、『新唐書』の編修者として認識することが一般的であろうし、『新唐書』のなかでも、特にその大きな部分を占めている伝の部分の編修が、彼の残した事績としては、おそらく最大のものであることは言うまでもない。だが、その一方で、『新唐書』の編修から離れて、古文家あるいは文学作品の作者としての面から彼を評価することは、ごく少ないように思われるし、さらにまた彼の文学観や文学論を取り上げて検討を加えることも、やはりめったにないのではないだろうか。つまり、文学作品の作者という面においては、彼はかなりマイナーな存在であると言わざるを得ない。

しかし、宋祁という人物が官僚としてまた史官として活動していた時期には、古文運動や、西崑体を超えた新しい詩風の追及といった文学の上での新しい動きがまさに起こっていたのであり、その動きの中心にいた歐陽脩らは彼のごく身近にいた人物なのである。そうであるならば、宋祁の残した詩文や、また関連する資料をもとにその文学観を検討することは、当時の文学の新しい動きの先頭にいたと目され、従来研究が進められてきた人物、例えば歐陽脩らについての考察をより深いものにしていくための、参考となし得るものなのではないだろうか。当時の詩文

を牽引する位置にあった歐陽脩らといえども、その時代において決して孤立した存在であったわけではなく、常に周囲の人々との関わりのなかで活動していたのだから。そこで以下では、宋祁の場合を例として、詩文や筆記等の資料から、その文学観、特に古文や唐代文学の受容の様相を中心に検討し、彼を含んだ北宋仁宗期における文学のあり方の一側面について考えてみたい。

一　『新唐書』の編修

北宋中期は、官撰史書の編修が盛んな時期である。相次いで編纂されたそれらの官撰史書のうちの多くは、各皇帝ごとの『實録』や、それらをもとに編修された『國史』、『會要』等の当代史によって占められているが、その他に歴代の君臣関係に関わる記述を集めた『冊府元龜』一千卷（真宗大中祥符六年（一〇一三）完成　王欽若（？～一〇二五）等撰）や、周威烈王から五代後周世宗までの一千三百六十二年間の歴史を記述する編年体史書である『資治通鑑』三百五十四卷（神宗元豐七年（一〇八四）完成　司馬光（一〇一九～一〇八六）撰）等をはじめとする、前代までの歴史を扱う著作についても、大部でありかつ後世において重視されるものがいくつも編纂されている。このような史書編纂の豊かな成果のうちのひとつとして、仁宗慶暦五年（一〇四五）から十七年間かけて編修された『新唐書』二百二十五卷を挙げることができるが、この『新唐書』が完成した嘉祐五年（一〇六〇）に提擧（編集責任者）の任にあった曾公亮（九九八～一〇七八）は、「進『唐書』表」（中華書局本『新唐書』末尾）冒頭で、その編修意図について次のように述べている。

臣公亮言。竊惟唐有天下幾三百年、其君臣行事之始終、所以治亂興衰之蹟、與其典章制度之英、宜其粲然著在簡册。而紀次無法、詳略失中、文采不明、事實零落。蓋又百有五十年、然後得以發揮幽沫、補緝闕亡、黜正僞繆、克備一家之史、以爲萬世之傳。成之至難、理若有待。

臣公亮言ふ。竊かに惟へらく　唐　天下を有つこと三百年に幾く、其の君臣行事の始終、治亂興衰の所以の蹟、其の典章制度の英と與に、宜しく其れ粲然として著されて簡册に在るべし。而れども紀次に法無く、詳略は中を失し、文采は明らかならず、事實は零落す。蓋し又た百有五十年、然る後に以て幽沫を發揮し、闕亡を補緝し、僞繆を黜正し、克く一家の史を備へ、以て萬世の傳と爲すを得。之を成すの至難、理　待つところ有るが若し。

仁宗に上奏するための公式の文章なので硬い表現になっているが、平易に訳せばおおよそ次のような内容になるだろう。「臣公亮が申し上げます。心の内に思いますところ、唐が天下を保つことは三百年に近く、その君臣の事跡の一部始終、治亂興衰の原因の在りかは、その典章制度の優れたところとともに、明らかに書き表され書物に記されるにふさわしいものであります。しかし（現行の『（舊）唐書』は、）記述の順序に規則が無く、詳細さと簡略さとは程よさを失っており、文章の表現技術は明らかなものではなく、事の真相はばらばらになっております。思いますところ、また百五十年の後に、不明であったことを残らず明らかにし、欠失していることを補い集め、偽りや誤りを取り除いて訂正し、十分に独自の見識を有する史書に整え、そこで永久に伝えるべきものとすることができました。この書物を完成することの常ならぬ困難さには、格別の理由があったようでございます。」

この『新唐書』に先立って存在していた『(舊)唐書』二百卷は、五代後晉高祖天福六年（九四一）から出帝開運二年（九四五）の四年余りをかけて、宰相の趙瑩・桑維翰・劉昫の監修のもと、張昭遠・賈緯らにより編修されたものである。ここで曾公亮は、『新唐書』を編修した理由として、『舊唐書』が「記述の順序に規則が無く、詳細さと簡略さとは程よさを失っており、文章の表現技術は明らかなものではなく、事の真相はばらばらになって」いることを挙げている。そこで「百五十年の後に、不明であったことを残らず明らかにし、欠失していることを補い集め、偽りや誤りを取り除いて訂正し、十分に独自の見識を有する史書に整え、そこで永久に伝えるべき」より質の高いものにすることを目指して、新しい『唐書』が編まれたと述べている。だがその編修はかなり困難なものであったらしく、この「進『唐書』表」の末尾において、曾公亮はその状況をさらに次のように記している。

乃因邇臣之有言、適契上心之所閔、於是刊脩官翰林學士兼龍圖閣學士・給事中・知制誥臣歐陽脩、端明殿學士兼翰林侍讀學士・龍圖閣學士・尚書吏部侍郎臣宋祁、與編脩官禮部郎中・知制誥臣范鎮、刑部郎中・知制誥臣王疇、太常博士・集賢校理臣宋敏求、祕書丞臣呂夏卿、著作佐郎臣劉羲叟等、並膺儒學之選、悉發祕府之藏、俾之討論、共加刪定、凡十有七年、成二百二十五卷。其事則增於前、其文則省於舊。至於名篇著目、有革有因、立傳紀實、或增或損、義類凡例、皆有據依。纖悉綱條、具載別録。臣公亮典司事領、徒費日月、誠不足以成大典、稱明詔、無任慚懼戰汗屏營之至。臣公亮誠惶誠懼、頓首頓首謹言。嘉祐五年六月□日曾公亮。

乃ち邇臣の言有り、適に上心の閔ふ所に契するに因りて、是に於いて刊脩官翰林學士兼龍圖閣學士・給事中・知制誥臣歐陽脩、端明殿學士兼翰林侍讀學士・龍圖閣學士・尚書吏部侍郎臣宋祁、編脩官禮部郎中・知制誥臣范鎮、刑部郎中・知制誥臣王疇、太常博士・集賢校理臣宋敏求、祕書丞臣呂夏卿、著作佐郎臣劉羲叟等と與に、並びに儒學の選を膺し、悉く祕府の藏を發し、之をして討論して、共に刪定を加へしむること、凡そ十有七年、二百二十五卷を成す。其の事は則ち前よりも増し、其の文は則ち舊よりも省く。名篇著目に至りては、革むる有り因む有り、傳を立て實を紀し、或ひは増し或ひは損し、義類凡例、皆な據依するところ有り。纖悉綱條は、具さに別録に載す。臣公亮　事を典司して領め、徒に日月を費やし、誠に以て大典を成して、明詔に稱ふに足らず、慚懼戰汗屏營の至りに任ふる無し。臣公亮　誠惶誠懼し、頓首頓首して謹み言ふ。嘉祐五年六月□日曾公亮。

これも訳してみると、だいたい次のようになるだろう。「そこでそば近くに仕える臣が発言し、たまたまお上の御懸念にかなったため、ここで刊脩官の翰林學士兼龍圖閣學士・給事中・知制誥臣歐陽脩、端明殿學士兼翰林侍讀學士・龍圖閣學士・尚書吏部侍郎臣宋祁は、編脩官の禮部郎中・知制誥臣范鎮、刑部郎中・知制誥臣王疇、太常博士・集賢校理臣宋敏求、祕書丞臣呂夏卿、著作佐郎臣劉羲叟等とともに、みな儒学の選を受け、ことごとく天子の大切な記録や書物を蔵する宮中の書庫を開き、彼らに得失と可否を詳しく議論して、一緒に文章の字句を削り正させること、およそ十七年にして、二百二十五巻を完成いたしました。収録事項は前の『舊唐書』よりも増し、文章表現は『舊唐書』よりも簡単にしました。篇目の表題に至っては、改めたものも従来どおりのものもあり、新たに伝を立てて事実を記し、増補したり削ったりし、文章や事柄の分類と凡例は、みな基づくところがあります。詳細と大綱とについては、

詳しく別録に記載しました。臣公亮は事業を主管して、徒に日月を費やし、誠に重要で大部な書物を完成し、賢き詔にかなうに足りませず、恥じて恐れおののき冷や汗をかいてうろたえることの至りに堪えません。臣公亮がこの上なく恐れ畏まり、幾度も頓首して謹んで申し上げます。嘉祐五六月□日曾公亮。」

ここでまず曾公亮は、編修に携わったスタッフとして刊脩官の歐陽脩と宋祁、編脩官の范鎮（一〇〇七～一〇八七）・王疇（？～一〇六五）・宋敏求（一〇一九～一〇七九）・呂夏卿（？～？）・劉羲叟（一〇一五～一〇五八）の名を挙げているが、宋敏求『春明退朝録』巻下（中華書局唐宋史料筆記叢刊　一九八〇年　以下同）が、「將卒業、而梅聖俞入局、修「方鎮」「百官」表。（將に業を卒えんとして、梅聖俞　局に入り、「方鎮」「百官」表を修す。）」と記しているように、これらの人々のほかに、梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）もまた最終段階で『新唐書』の編修に参与している。

さらにこれに続く部分で曾公亮は、『舊唐書』と比べた『新唐書』の編修の具体的な特色に言及し、「収録事項は前の『舊唐書』よりも増し、文章表現は『舊唐書』よりも簡単にした。篇目の表題に至っては、改めたものも従来どおりのものもあり、新たに傳を立てて事実を記し、増補したり削ったりし、文章や事柄の分類と凡例は、みな基づくところがある。詳細と大綱とについては、詳しく別録に記載し」たと述べている。ここでは文章表現について「其文則省於舊」と述べているが、北宋期における古文復興の中心人物である歐陽脩をその刊脩官のひとりとする『新唐書』において、古文が採用されたことについて、彼とならんで刊脩官となり、傳の部分を執筆した宋祁は、『宋景文公筆記』巻上「釋俗」（『學津討源』江蘇廣陵古籍刻印社影印　一九九〇年　所収本　以下同）で次のように述べている。

文有屬對平側用事者、供公家一時宣讀施行以便快然、久之不可施於史傳。余修『唐書』、未嘗得唐人一詔一令、可載於傳者、唯捨對偶之文、近高古乃可著於篇。大抵史近古對偶宜。今以對偶之文入史策、如粉黛飾壯士、笙匏佐鼙鼓、非所施云。

文に屬對・平側・用事する者有り、公家の一時宣讀施行するに供するに以て便ち快然たり、之を久しくするも史傳に於いては施すべからず。余　『唐書』を修するに、未だ嘗て唐人の一詔一令の、傳に載するべき者を得ず、唯だ對偶の文を捨て、高古に近きは乃ち篇に著すべきなるのみ。大抵史は近古の對偶なれば宜しきなり。今　對偶の文を以て史策に入るれば、粉黛もて壯士を飾り、笙匏もて鼙鼓を佐くるが如くにして、施すところに非ずと云ふ。

「文章には対句・平仄・典拠を用いるものがあり、朝廷でしかるべき機会に衆人によく聞こえるよう朗誦して実施するのに充てるにはそのままで心地よいものであり、これは変えないでおいても史書には用いるべきではない。私は『（新）唐書』を編修していて、今までに唐代の人のたった一つの詔や令でも、伝に掲載できるものを見つけたことはなく、ただ対偶を構成している文（駢文）を捨て、高潔古雅に近い文章であってはじめて篇章に記すことができるのみである。大体、史書においては古代のものに近い対偶表現であればよい。今、対偶表現の文章を歴史書に取り入れたなら、おしろいや黛で意気盛んな勇士を飾りたて、笙や匏で攻め鼓を助けるようなもので、すべきものではないという。」

ここで宋祁は、「対偶表現・平仄・典拠を用いた文」、つまり駢文は、朝廷での朗誦には好適だが、史書の文体としては不適当であると指摘している。さらに彼自身の体験的な例として『（新）唐書』の編修の際に、

駢文を排除し、「近高古」つまり高潔古雅に近い文章を取り入れたことを言い、また史書への採用が可能な対偶表現の条件として、古代の文章の表現に近いものであることを挙げている。このような記述は、『新唐書』編修の中心人物として伝の執筆を担当した宋祁が、採用する文体の基準をどのように考えていたかを示すものだが、同時に、古文の作者として取り上げられることの少ない宋祁が、史書編纂において古文を重視していたことをも明らかにしているだろう。

なお、周知の通り、この『新唐書』編修期間中の嘉祐二年（一〇五七）の禮部試において、知貢挙の歐陽脩が、古文を用いた蘇軾（一〇三六～一一〇一）・蘇轍（一〇三九～一一一二）兄弟、曾鞏（一〇一九～一〇八三）らを合格させたことが、以後の広範な古文の普及の契機となったが、この時の貢挙参詳官には、『新唐書』の編修者のうち范鎮と梅堯臣が名を連ねている。この時の貢擧のスタッフ（歐陽脩・梅摯（?～?）・韓絳（一〇一二～一〇八八）・范鎮・王珪（一〇一九～一〇八五）・梅堯臣）による応酬詩を集めた『禮部唱和集』には、古文の採用についての言及を見ることはできないが、構成員が重複していることからは、このときの貢挙の担当者たちと『新唐書』の編修者たちの発想や気分に、何がしかの繋がりを推測することも可能であろう。

二　『新唐書』編修と宋祁の文章修行

このように『新唐書』の編修は、古文復興という大きな流れとも関わっていたと思われるが、また宋祁自身にも、文章修行のためのよい機会を与えることにもなったようだ。これについて宋祁は、『宋景文公筆記』巻上「釋俗」で、次のように記している。

余少爲學本無師友、家苦貧無書、習作詩賦未始有志立名於當世也。願計粟米養親紹家閥耳。年二十四而以文投故宰相夏公、公奇之、以爲必取甲科。吾亦不知果是歟。天聖甲子從鄉貢試禮部、故龍圖學士劉公嘆所試辭賦、大稱之朝、以爲諸生冠。吾始重自淬礪力於學、模寫有名士文章、諸儒頗稱、以爲是年過五十。被詔作『唐書』、精思十餘年、盡見前世諸著、乃悟文章之難也。雖悟於心、又求之古人、始得其崖略。因取視五十已前所爲文、赧然汗下、知未嘗得作者藩籬、而所效皆糟粕芻狗矣。夫文章必自名一家、然後可以傳不朽。若體規畫圓準方作矩、終爲人之臣僕。古人譏屋下作屋、信然。

余　少くして學を爲すに本より師友無く、家は苦だ貧しくして書無く、習ひて詩賦を作るに未だ始めより名を當世に立つるの志有らざるなり。粟米を計りて親を養ひ家閥を紹がんと願ふのみ。年二十四にして文を以て故宰相夏公に投ずるに、公　之を奇しみ、以爲らく必ず甲科を取らんと。吾　亦た果たして是なるを知らざるかな。天聖甲子　鄉貢に從ひて禮部に試みらるるに、故龍圖學士劉公　試する所の辭賦に嘆じ、大ひに之を朝に稱し、以て諸生の冠と爲す。吾　始め自ら淬礪して學に力むるを重んじ、有名の士の文章を模寫するに、諸儒頗る稱し、以爲らく是れ年は五十を過ぎんと。詔を被りて『唐書』を作り、精思すること十餘年、盡く前世の諸著を見、乃ち文章の難きを悟るなり。心に悟ると雖も、又た之を古人に求め、始めて其の崖略を得。因りて取りて五十已前に爲る所の文を視るに、赧然として汗下り、未だ嘗て作者の藩籬を得ずして、效ふ所は皆な糟粕芻狗なるを知れり。夫れ文章は必ず自ら一家を名のり、然る後に以て傳はりて朽ちざるべし。若し規に體して圓を畫き方に準して矩を作らば、終ひに人の臣僕と爲らん。古人の屋下に屋を作ると譏

れるは、信に然り。

ここで宋祁は、自分自身の文章修行について語っている。彼が省試を受験した際の「采侯」詩が評判になったことは、歐陽脩『六一詩話』最終段にも記されているが、ここでの宋祁自身の言葉によれば、その後は名士の文章を模倣することで上手としての評価を得ていたらしい。しかし『唐書』の編修に従事した十年余りの間、彼は数多くの文章を読んで熟考することになり、そこであらためて文章を書くことの難しさを痛感したという。さらに宋祁は、その時自分が五十歳以前に書いた他人を模倣するばかりの文章を恥じ、「文章というものは必ず自分で独立した一家を名のり、それで初めて不朽のものとなり得るのだ」と、文体の個性の重要性に気づいたと述べている。

自らの文章修行について、宋祁はまた同じ『宋景文公筆記』巻上「釋俗」で、次のようにも述べている。

余於爲文、似蘧瑗瑗。年五十知四十九年非。余年六十始知五十九年非、其庶幾至於道乎。天稟余才纔及中人。中人之流、未能名一世、然自力於當時、則綽綽矣。

余　文を爲るに於いて、蘧の瑗瑗たるが似し。年五十にして四十九年の非を知る。余年六十にして始めて五十九年の非を知るは、其れ道に至るに庶幾きか。天の余に稟する才は纔かに中人に及ぶのみ。中人の流は、未だ能く一世に名あらず、然して自ら當時に於いて力むれば、則ち綽綽たらん。

宋祁がここで自分の文章制作のイメージとして示している「円形に咲き広がった蓮の花」は、満開の花の豊かな美しさを言うものだろうが、この状態に至るまでには長い期間に渡る努力を要したという。「五十歳で四十九年間の間違いを悟」り、さらに「六十歳でやっと五十九年間の間違いを悟った」、また「天が私に与えた才能はやっと中等の人に及ぶだけのものだ」と宋祁は述べている。なお、この「時に応じて努力を重ねて道に至る」という考え方には、儒教、とりわけ宋学的な発想との関連を指摘することもできるかもしれない。

ところで、ここで言う「年五十知四十九年非。余年六十始知五十九年非、」は、その年齢から見て、先に挙げた資料でも言及されていた『新唐書』の編修と関わるものではないかと思われる。『新唐書』の編修過程を宋祁との関わりから整理してみると、宋祁は真宗咸平元年（九九八）の生まれなので、『新唐書』の編修が始まった仁宗慶暦五年（一〇四五）には数え年で四十八歳であった。なお、『續資治通鑑長編』巻一百五十五の、同年五月己未の記事には、王堯臣（一〇〇一～一〇五六）・張方平（一〇〇七～一〇九一）・余靖（一〇〇〇～一〇六四）を刊修『唐書』に任じたとあり、宋祁の名は挙げられていない。刊修官となり傳の執筆を担当することになった皇祐元年（一〇四九）六月壬午（同巻一百六十六）当時、宋祁は五十二歳であり、「年五十知四十九年非。」は、編修に参与する少し前のことを言うことになる。宋祁が編修に加わった頃の経緯について、同じく編修官のひとりであった宋敏求の『春明退朝録』巻下は、次のように記している。

初景文修『慶暦編敕』、未暇到局。而趙少師請守蘇州。王文安丁母憂、張・楊皆出外、後遂景文獨下筆。久之、歐少師領刊修、遂分作「紀」「志」。

初め景文　『慶暦編敕』を修し、未だ局に到る暇なし。而れども趙少師　請ひて蘇州に守たり、王文安　母憂に丁し、張・楊は皆な外に出で、後に遂に景文　獨り筆を下ろす。之を久しくして、歐少師刊修を領し、遂に分けて「紀」「志」を作す。

これによると、宋祁（謚、景文公）は『慶暦編敕』の編修を担当していたため、当初は『唐書』編修局にやってくる暇がなかったらしい。しかし、趙少師（概）が知蘇州となり王文安（堯臣）が母の喪に遭い、張方平・楊察が外任したため、とうとう宋祁が一人で執筆を担当することになったという。さらに、このような状態が続いた後、歐少師（歐陽脩）が刊修官を受け、ついに分けて「紀」「志」を制作したとされている。

宋敏求はここで触れていないのだが、宋祁が五十四歳であった同三年（一〇五一）二月戊申に、越國夫人曹氏の客であった張彦方が、敕牒を偽造して人を官職に就けようとして罪に問われるという事件が起こったが、その際、宋祁は息子が張彦方と交際していたことで咎めを受け、外任して知亳州（現河南省）となった（同巻一百七十）。しかし早くも三月乙卯には、宋祁に対して、亳州において『唐書』を編修するよう命が下（同巻一百七十）っている。なお、その後知益州（現四川省）に赴任した際にも、任地で『唐書』の編修を続けていたらしく、魏泰（生卒年未詳。黄庭堅らと交遊あり。）『東軒筆録』巻十五（中華書局　唐宋史料筆記叢刊　一九八三年）には、その様子が次のように記されている。

宋子京博學能文章、天資蘊藉、好游宴、以矜持自喜。晚年知成都府、帶『唐書』於本任刊修。毎宴罷、盥漱畢、開寢門、垂簾、燃二椽燭、媵婢夾侍、和墨伸紙。遠近觀者、皆知尚書修『唐書』矣。望之如神仙焉。

宋子京　博學にして文章を能くし、天資　蘊藉にして、游宴を好み、矜持するを以つて自ら喜ぶ。晚年　成都府を知するに、『唐書』を帶し本任に於いて刊修す。毎に宴罷むに、盥漱畢はり、寢門を開き、簾を垂れ、二椽燭を燃やし、媵婢夾侍して、墨を和し紙を伸ばす。遠近より觀る者、皆な尚書の『唐書』を修すると知れり。之を望むに神仙の如し。

これによると、任地で公務や宴の終わった夜遅い時間に編修していたようだ。

その後も度重なる編修官の交替（煩瑣なため詳細は省くが、宋敏求『春明退朝録』巻下等に詳しい。）もあって『唐書』の編修は進まず、五十七歳の至和元年（一〇五四）七月甲子には、刊修官の宋祁・編修官の范鎮等に「速かに修する所の『唐書』を上る」よう詔があり（同巻一百七十六）、同年八月戊申に歐陽脩に刊修『唐書』の命が下りた（同）。同書がやっと完成した嘉祐五年（一〇六〇）には、宋祁は既に六十三歳になっていた。彼の言う「余年六十始知五十九年非、」は、せかされながら懸命に編修していた頃の感慨だろうか。

『新唐書』完成の翌年、嘉祐六年（一〇六一）に、宋祁は六十四歳で没したので、『新唐書』の編修は結果的に彼のライフワークになってしまった。先に引いた『宋景文公筆記』に収められている文章二篇の制作年代は明らかではないが、その内容から、晚年のものではないかと思われる。なお、この『宋景文公筆記』巻上「釋俗」には、文章制作に関わって、次のような記述も見ることができる。

毎見舊所作文章、憎之必欲燒棄。梅堯叟喜曰、「公之文進矣。僕之爲詩亦然。」

毎に舊作れる所の文章を見るに、之を憎みて必ず燒き棄てんと欲す。梅堯叟　喜びて曰く、「公の文　進めり。僕の詩を爲るも亦た然り」と。

自分がかつて書いた文章に我慢がならないという宋祁の態度は、これまでに挙げた資料に見られたものと同様と言えよう。ここに登場して彼を褒めている「梅堯叟」という人物については不明だが、自分の詩作を

引き合いに出していることから、大詰めになって編修に参加した梅堯臣の可能性もあるのではないかと思われる。

三　宋祁の文学観

先に挙げた『宋景文公筆記』巻上「釋俗」の、年少時から『新唐書』の編修に従事するまでの文章修行について述べた文章（余少爲學本無師友～）で、宋祁は、『唐書』の編修に従事した十年余りの間に数多くの文章を読んで熟考することにより、あらためて文章を書くことの難しさを痛感し、さらに自分が五十歳以前に書いた他人を模倣するばかりの文章を恥じて、文体の個性の重要性に気づいたと述べていたが、この章段にはさらにもう少し続きがあり、そこには次のように記されている。

陸機曰、「謝朝花於已披、啓夕秀於未振。」韓愈曰、「惟陳言之務去。」此乃爲文之要。五經皆不同體、孔子没後、百家奮興、類不相沿。是前人皆得此旨。嗚呼、吾亦悟之晩矣。雖然、若天假吾年、猶冀老而成云。

陸機曰く、「朝花を已に披けるに謝し、夕秀を未だ振はざるに啓く」と。韓愈曰く、「惟だ陳言は之を務めて去るのみ」と。此れ乃ち文を爲るの要なり。五經　皆な體を同じくせず、孔子　没して後、百家奮ひ興こり、類は相ひ沿はず。是れ前人　皆な此の旨を得たり。嗚呼、吾は亦た之を悟ること晩きかな。然りと雖も、若し天　吾に年を假さば、猶ほ老ひて成るを冀ふと云ふ。

ここで「文章制作の要点」として引用されている陸機「文賦」（文選巻十七）と韓愈「答李翊書」（韓昌黎文集校注巻三）の語句は、文脈から、いずれも先人が既に用いた表現は避けるべしとする考え方を述べたものとして捉えられていると思われる。さらに宋祁は、五經の文体が異なっており、孔子の没後に起こった百家が文体を踏襲しあわなかったのは、先人たちが、文体は先人を模倣するのではなく様々な個性を持つべきである、という要点を会得していたからだと述べている。既に検討した部分も含めて、この章段で宋祁は文体の個性を重視する態度を強調しているが、『宋景文公筆記』のなかには、これ以外にも文体や表現の個性の重視に言及した箇所をいくつか指摘することができる。

柳州爲文、或取前人陳語用之、不及韓吏部卓然不丐於古、而一出諸己。劉夢得巧於用事、故韓柳不加品目焉。　（巻上「釋俗」）

柳州の文を爲るは、或ひは前人の陳語を取りて之を用ひ、韓吏部の卓然として古へに丐（くう）からざるといえども、一に諸を己より出だすに及ばず。劉夢得は事を用ふるに巧みにして、故に韓柳は品目を加へざるのみ。

柳子厚「正符」「晉説」、雖模寫前人體裁、然自出新意、可謂文矣。劉夢得著「天論」三篇、理雖未極、其辭至矣。韓退之「送窮文」「進學解」「毛穎傳」「原道」等諸篇、皆古人意思未到、可以名家矣。　（巻中「考古」）

柳子厚の「正符」「晉説」は、前人の體裁を模寫すると雖も、然るに自ら新意を出だし、文と謂ふべし。劉夢得の著せる「天論」三篇は、理　未だ極まらざると雖も、其の辭は至れり。韓退之の「送窮文」「進學解」「毛穎傳」「原道」等の諸篇は、皆な古人の意思して未だ到らざるところにして、以て名家たるべし。

柳子厚云、「嘻笑之怒、甚於裂眦。長歌之音、過於慟哭。」劉夢得云、

「駭機一發、浮謗如川。」信文之險語。韓退之云、「婦順夫旨、子嚴父詔。」又云、「耕於寛閑之野、釣於寂寞之濱。」又云、「持被入直二省、丁寧顧婢子語、刺刺不得休。」此等皆新語也。（巻中「考古」）

柳子厚云へらく、「嘻笑の怒りは、眦を裂くよりも甚だし。長歌の音は、慟哭よりも過ぎたり」（出典未詳。）と。劉夢得云へらく、「駭機　一たび發し、浮謗　川の如し」と。信に文の險語なり」（「上淮南李相公啓」）と。韓退之云へらく、「婦は夫の旨に順ひ、子は父の詔を嚴にす」（「柳州羅池廟碑」）と。又た云へらく、「寛閑の野に耕し、寂寞の濱に釣す」（「答崔立之書」）と。又た云へらく、「持被して入りて二省に直し、丁寧に婢子の語を顧み、刺刺として休むを得ず」（「送殷員外序」）と。此れ等は皆な新語なり。

ここに挙げた三例は、いずれも韓愈・柳宗元・劉禹錫の文章について批評したものである。このうち韓愈と柳宗元については、後世においていわゆる唐宋八大家に数えられ、中唐期における古文復興の中心人物として目されることの多い人物だが、宋祁の文学批評においては、両者と並んで劉禹錫が加えられており、彼独自の視点を示したものと言うことができよう。このうちまず巻上「釋俗」の文章では、柳宗元の文は前人の言い回しをそのまま用いることがあり、先人の著作に通じていても、ひたすらオリジナルの語を用いる韓愈には及ばないと評し、また劉禹錫は故事の引用に巧みであり、そのため韓愈・柳宗元は品評を加えなかったとしている。また巻中「考古」の文章では、具体的な作品名を挙げながら、古人の考え至らなかった文章を書いた韓愈を「名家」と評価し、前人のスタイルを模写するが独創性があるとして柳宗元を評価し、さらに「辞」（言語表現）の極致として劉禹錫を挙げている。

さらに巻中「考古」のもう一つの条では、古文ではない文体の「啓」「碑」をも含んで、具体的な文例を挙げて韓愈・柳宗元・劉禹錫を併称しているが、その評価のポイントとなっているのは「新語」、つまり新しい表現であることであり、これまでに見てきた資料とともに、宋祁が自己の文章制作のみならず過去の文章に対する批評においても、巧みに典故をふまえた表現よりも、著者による独創的な表現をより評価していたことを示している。

また宋祁は『新唐書』巻一百七十六「韓愈傳」でも、韓愈の古文制作について次のように述べている。

毎言文章自漢司馬相如・太史公・劉向・楊雄後、作者不世出。故愈深探本元、卓然樹立、成一家言。其「原道」「原性」「師説」等數十篇、皆奥衍閎深、與孟軻・楊雄相表裏而佐佑六經云。至它文造端置辭、要爲不襲蹈前人者。然惟愈爲之、沛然若有餘。至其徒李翺・李漢・皇甫湜從而效之、遽不及遠甚。

毎に言へらく文章は漢の司馬相如・太史公・劉向・楊雄より後、作者　世に出でずと。故に愈は深く本元を探りて、卓然として樹立し、一家の言を成す。其の「原道」「原性」「師説」等數十篇は、皆な奥衍閎深にして、孟軻・楊雄と相ひ表裏して六經を佐佑すると云ふ。它の文の造端置辭に至りては、要めて前人を襲蹈せざる者を爲す。然るに惟だ愈のみ之を爲し、沛然として餘り有るが若し。其の徒の李翺・李漢・皇甫湜に至りては從ひて之に效ひ、遽かには及ばずして遠きこと甚し。

ここでは韓愈の「漢の司馬相如・太史公（司馬遷）・劉向・楊雄以降、文章の優れた書き手が世に出なかった」という言葉を引用し、そこで韓愈はその根本を深く探り、高く抜きん出た「一家言」、つまり独立した文章家としての固有のスタイルを完成したと述べている。また、韓愈の

「原道」「原性」「師説」等の數十篇は、みな深みがあり豊かなものであり、孟子・揚雄と互いに表裏となって六經を助けるものである、と高い評価を与えている。さらに韓愈の文章の書き出しかたと言葉の用いかたについては、かならず前人の文章を襲蹈しないものを制作したと述べて、その独創性を高く評価し、門弟の李翺・李漢・皇甫湜はそれを模倣しようとしてもできなかったと述べている。

このように宋祁が文章の独創性を重視するのは、自己の文章制作についてだけではなく、過去の作者による既存の文章を批評する場合にも共通しており、その際、とりわけ独創性の高い文章の作者として、韓愈に高い評価が与えられている。ところで韓愈の文章表現の特色については、後に黄庭堅（一〇四五～一一〇五）が「答洪駒父書」（「宋黄文節公全集」正集巻十八　黄庭堅全集　四川大學出版社　二〇〇一年）において、次のように評していることが、よく知られているだろう。

自作語最難、老杜作詩、退之作文、無一字無來處、蓋後人讀書少、故謂韓・杜自作此語耳。古之能爲文章者、眞能陶冶萬物、雖取古人之陳言入於翰墨、如靈丹一粒、點鐵成金也。

自ら語を作すは最も難く、老杜の作詩、退之の作文は、一字として來處無きこと無し、蓋し後人は書を讀むこと少なく、故に韓・杜は自ら此の語を作れると謂へるのみ。古の能く文章を爲る者は、眞に能く萬物を陶冶すれば、古人の陳言を取りて翰墨に入るると雖も、靈丹の一粒の如く、鐵を點じて金と成すなり。

この文章は、いわゆる「點鐵成金」の典拠として引かれることの多いものだが、ここでの黄庭堅は、韓愈の文章を、一字として出典を持たないことがないものと捉え、それをうまく「陶冶」していることにその「能文」さを見出している。ここで見てきた宋祁の捉え方は、黄庭堅からは、「書物の読みようが少ないために、韓愈・杜甫は自らこの語を作ったのだと思」っているのだと批判されるものなのかもしれないが、それはどちらが正しいといったものではなく、両者の志向の違いによる着眼点の違いということができるのではないだろうか。さらに言うならば、両者の志向の違いの背景には、それぞれの時代の志向の違いが存在していると思われる。

四　「自立之言」と「一家之言」

では、この北宋仁宗期にあっては、古文の習得ならびに文章批評においてこのように独創性を重視する態度は、宋祁のみに見ることのできるものなのであろうか。そこで次に、宋祁と同時代に活動し、彼の身近にいた人物でもあり、かつ当時における古文復興の代表的な人物でもある歐陽脩の場合について少し検討し、比較してみたい。

すでに見たように、宋祁は『新唐書』の編修が、彼にとって文章修行のよい機会となったと考えていたが、歐陽脩が、彼自身の文章修行について述べた文章として、まず想起されるのは、年少期における韓愈文集の偶然の発見からその後の古文復興への経緯を述べた、嘉祐年間（一〇五六～一〇六三）の作とされる（目録での注記による。）「記舊本韓文後」（居士外集巻二十三）だろう。だが、それ以前の、夷陵令に左遷されていた景祐四年（一〇三七）に書かれた（目録の注記による。）「與荊南樂秀才書」（居士集巻四十七　四部叢刊所収本　以下同）にも、次のような記述を見ることができる。

僕少孤貧、貪禄仕以養親、不暇就師窮經以學聖人之遺業。而涉獵書

史、姑隨世俗作所謂時文者、皆穿蠹經傳、移此儷彼、以爲浮薄、惟恐不悅于時人、非有卓然自立之言如古人者。然有司過採、屢以先多士。及得第已來、自以前所爲不足以稱有司之擧而當長者之知、始大改其爲、庶幾有立。然言出而罪至、學成而身辱。爲彼則獲譽、爲此則受禍、此明効也。夫時文雖曰浮巧、然其爲功亦不易也。僕天姿不好、而彊爲之、故比時人之爲者尤不工、然已足以取禄仕而竊名譽者順時故也。先輩少年志盛方欲取榮譽於世、則莫若順時。

僕　少きより孤貧にして、禄仕して以て親を養ふを貪り、師に就きて經を窮め以て聖人の遺業を學ぶに暇あらず。而して書史を涉獵し、姑く世俗の作る所謂時文なる者に隨ふに、皆な經傳を穿蠹して、此を移し彼に儷べ、以て浮薄なりと爲すも、惟だ時人に悅ばれざるを恐るるのみにして、卓然たる自立の言の古人の如き者有るに非ず。然るに有司　採るを過ち、屢　以て多士に先んじせしむ。得第するに及びて已來、自ら以前爲す所は　以て有司の擧に稱ひて長者の知に當たるに足らざれば、始めて大ひに其の爲すところを改め、立つ有るに庶幾し。然るに言出でて罪は至り、學成りて身は辱められる。彼を爲せば則ち譽を獲、此を爲せば則ち禍を受く、此れ明効なり。夫れ時文は浮巧なりと曰ふと雖も、然るに其の功を爲すは亦た易からざるなり。僕　天姿　好からず、而れども彊ひて之を爲し、故に時人の爲す者に比して尤も工ならず、然るに已に以て禄仕を取りて名譽を竊むに足れるは時に順ふが故なり。先輩　少年に志盛んにして方に榮譽を世に取らんと欲すれば、則ち時に順ふに若くは莫し。

この手紙を宛てた樂秀才という人物については未詳だが、ここで歐陽脩はこの人物に対して、自らの古文習得の経緯を詳しく説明している。まず、科挙及第以前については、幼くして父を亡くし貧しかったため、じっくりと学問を深めることよりも仕官して俸給を得て母親を養うことに急ぎ、書物を広くあさり読んで時文（駢文）を制作したと述べている。さらに当時、駢文に対して、「みな経書の本文や傳に穴を開けて虫食いにし、これを移しあれをならべるようなものであったので、軽薄に感じた」とも述べ、また当時の自分の態度については、世の中の人に受け入れられないことを恐れていたが、「古人」のように高く抜きん出た自立した文章表現はできなかったとしている。またその後の科挙及第以降については、自分が以前に制作したものは、科挙向きではあっても優れた人の知るところとなるには不十分だと考え、初めて大いにその制作する文章を改めた結果、自立したものに近くなったと述べている。ここではこの「大ひに其の爲すところを改めた」結果作られた文章が古文であるとは明言されていないが、「記舊本韓文後」（居士外集巻二十三）の「擧進士及第、官于洛陽、而尹師魯之徒皆在、遂相與作爲古文。（進士に擧げられ及第し、洛陽に官するに、而して尹師魯の徒皆な在り、遂に相ひ與に作りて古文を爲す。）」という記述と照らし合わせれば、古文を指しているものと考えてよいだろう。

この文章において興味深いのは、歐陽脩が、自ら駢文から古文へと志向を改めた経緯を、「自立之言」を求める過程として説明していることである。そして、この「自立之言」は、「古人」がそうであったのに類するともされている。

この「古人」と「自立之言」との関わりについて、さらに学問や文章表現について、歐陽脩は、前の書の前年の景祐三年（題下の注記による。）に、同じ人物に宛てた「與樂秀才第一書」（居士外集巻十九）では、次のように述べている。

古人之學者非一家、其爲道雖同、言語文章未嘗相似。孔子之繫『易』、

周公之作書、奚斯之作頌、其辭皆不同、而各自以爲經、子游子夏子張與顔回同一師、其爲人皆不同、各由其性而就於道耳。今之學者或不然、不務深講而篤信之、徒巧其詞以爲華、張其言以爲大。夫強爲則用力艱、用力艱則有限、有限則易竭。又其爲辭、不規模於前人、則必屈曲變態、以隨時俗之所好、鮮克自立。此其充於中者不足而莫自知其所守也。

古人の學は一家に非ず、其の道爲るは同じと雖も、言語文章は未だ嘗て相ひ似ず。孔子の『易』に繫し、周公の書を作り、奚斯の頌を作るは、其の辭　皆な同じからず、而も各おの自ら以て經と爲す、子游子夏子張は顔回と師を同一にするも、其の人と爲りは皆な同じからず、各おの其の性によりて道に就けるのみ。今の學ぶ者は或ひは然らず、深く講して之を篤く信ずるに務めず、徒に其の詞を巧みにして以て華を爲し、其の言を張りて以て大を爲す。夫れ強ひて爲せば則ち力を用ふること艱く、力を用ふること艱ければ則ち限り有り、限り有れば則ち竭き易し。又た其の辭を爲すに、前人に規模せざれば、則ち必ず屈曲變態して、以て時俗の好む所に隨ひ、克く自立すること鮮なし。此れ其の中に充てる者足らずして自ら其の守る所を知ること莫きなり。

歐陽脩はここで、古人の言語表現や学問は自立したものであり、それぞれに異なった個性を持っていると述べて、深く議論することもなしに言葉を飾り大げさに表現する「今之學者」の態度を批判しており、ここでいう「今之學者」は、時文つまり当時流行の文体であった駢文の作者たちを指していると思われる。ここに挙げた歐陽脩の二つの書簡は、いずれも彼の生涯のなかで比較的早い時期である景祐年間の夷陵令左遷中の作であり、これに先立つ時期に、洛陽留守推官に在任していた彼が、尹洙から刺激を受けて古文の制作をはじめていることを考え合わせると、本来の彼の古文は、古人に学びつつも、単にそれを模倣するのではなく、より自立性のある文章や学問を志向するものであったことが推測される。歐陽脩のこのような態度は、その古人の文章に学びつつも、独立した自己の文体を模索するという点において、すでに本稿で見てきた宋祁の文章修行における姿勢、例えばすでに見た『宋景文公筆記』巻上「釋俗」の、「夫文章必自名一家、然後可以傳不朽。若體規畫圓準方作矩、終爲人之臣僕。（夫れ文章は必ず自ら一家を名のり、然る後に以て傳りて朽ちざるべし。若し規に體して圓を畫き方に準して矩を作らば、終ひに人の臣僕と爲らん。）」等に近似したものであるし、また古人の言語表現や学問は自立したものであり、それぞれに異なった個性を持っているという考え方には、同じ「釋俗」の、「五經皆不同體、孔子没後、百家奮興、類不相沿。是前人皆得此旨。（五經　皆な體を同じくせず、孔子　没して後、百家奮ひ興こり、類は相ひ沿はず。是れ前人　皆な此の旨を得たり。）」との類似を指摘することができよう。

このように歐陽脩と宋祁は、文章や学問における強い自立性の志向を持っていると思われるが、ただ、ここで彼らが文体の独立の規範として示しているのが、儒教の経書であることに注意しておくべきだろう。古文と儒家の理念との関わりについて考えるには、まず中唐期における古文の復興者である韓愈にまで遡る必要があるだろうが、周知のとおり、韓愈が「古」における理想の文章の作者として位置づけているのは、漢代の文章家たちである。韓愈は「送孟東野序」（韓昌黎文集校注巻四　上海古籍出版社　一九八六年）において、

秦之興、李斯鳴之。漢之時、司馬遷・相如・揚雄最其善鳴者也。其下魏・晉氏、鳴者不及於古、然亦未嘗絶也。

秦の興るや、李斯　之に鳴る。漢の時、司馬遷・相如・揚雄は最も其の善く鳴る者なり。其の下の魏・晉氏は、鳴る者は古へに及ばず、然れども亦た未だ嘗つて絶えざるなり。

と述べ、漢の司馬遷・司馬相如・揚雄を「古」の最もよく鳴り響いた者、つまり最高の文章の書き手として高く賞賛し、また「答崔立之書」（韓昌黎文集校注巻三）では、吏部詮試の落第をめぐる憤懣を、「誠使古之豪傑之士若屈原・孟軻・司馬遷・相如・揚雄之徒進于是選、必知其懷慚乃不自進而已耳。（誠に古の豪傑の士の屈原・孟軻・司馬遷・相如・揚雄の徒の若きをして是の選に進めしむれば、必ず其の懷慚して乃ち自ら進まざるのみなるを知らん。）」と述べている。これらから明らかなように、文章によって多少の出入りはあるものの、韓愈は概ね漢の司馬相如・司馬遷・揚雄を文章の最高の作者と認めており、理想とすべき「古之豪傑」としては、この他に先秦の屈原・孟子を挙げている。

宋祁は先にも挙げた『新唐書』巻一百七十六「韓愈傳」で、韓愈の古文制作について、

毎言文章自漢司馬相如・太史公・劉向・楊雄後、作者不世出。故愈深探本元、卓然樹立、成一家言。其「原道」「原性」「師説」等數十篇、皆奥衍閎深、與孟軻・楊雄（ママ）相表裏而佐佑六經云。至它文造端置辭、要爲不襲蹈前人者。

毎に言へらく文章は漢の司馬相如・太史公・劉向・楊雄（ママ）より後、作者　世に出でずと。故に愈は深く本元を探りて、卓然として樹立し、一家の言を成す。其の「原道」「原性」「師説」等數十篇は、皆な奥衍閎深にして、孟軻・楊雄（ママ）と相ひ表裏して六經を佐佑すると云ふ。它の文の造端置辭に至りては、要めて前人を襲蹈せざる者を爲す。

と述べ、韓愈が「古」、具体的には漢の司馬相如・司馬遷・劉向・揚雄の文章を高く評価し、その後途絶えてしまった伝統を復興するために、「深く本元を探」って、高く抜きん出た「一家言」を樹立したと述べている。さらに特に「原道」「原性」「師説」等の数十篇については、みな深みがある豊かなものであり、孟軻・揚雄と互いに表裏となって六經を助けるものだと賞賛しており、韓愈の古文制作に対して、「古」の孟子、揚雄以来の儒教の道統を継承するものという位置づけを与えている。

中唐期の韓愈の古文復興における「古」への志向について、すでに王運熙氏・楊明氏は、「韓愈曾多次説、他之提唱古文、與企圖復古道有關。（韓愈は、彼の古文提唱が、古の道に復すことを図ることと関わるものであると何度も述べている。）」（『隋唐五代文學批評史』第二編「唐代中期的文學批評」第四章「中唐古文作者及其先驅的文學批評」第三節「韓愈」一「提唱古文、反対駢體」四百八十七頁　一九九四年　上海古籍出版社）と指摘され、また川合康三氏は「韓愈の『古』への志向―貞元年間を中心に―」（終南山の変容―中唐文学論集　一九九九年　研文出版）三「孟郊との出会い」二百十五頁において、貞元年間の吏部試験における挫折が、韓愈に「少年時代から自己形成の規範としてきた『古』が現実の世の中を動かしている原理と合致しないことに気づき、『古』を『今』と対立するものと把握しなおしていっそう自覚的に『古』に傾倒していく」負の契機となったと指摘されているように、科挙及第の後、長期間にわたって不遇な状態に置かれていた韓愈が、「古人」、具体的には先秦の孟子・漢の揚雄らに精神のありようの理想を見出し、その理想を継承し、実現していくために、その思考を盛る器として、「古」の簡潔な文体である「古文」を制作しようとしたと考えることができ、宋祁もまた韓愈に対して同じような認識を持っていたと思われる。

これに対して歐陽脩は、韓愈の古文制作あるいは彼自身の古文制作に

ついて、儒家の道統の継承という位置づけに直接言及することは少ないが、嘉祐二年の貢挙の受験者（曾鞏）や関係者（蘇軾・蘇轍の父である蘇洵）から奉られた書、あるいは没後に彼を顕彰した墓誌銘（韓琦による）・行状（呉充による）においては、古文の作者として、しばしば孟子・揚雄から韓愈へと続く古文の系統をさらに継承しながらも、さらに固有の文体を樹立した存在として位置づけられている。

ところで、第一章で挙げた、『宋景文公筆記』巻上「釋俗」の文章のなかで、宋祁は「夫文章必自名一家、然後可以傳不朽。」と述べていた。既に見たように、このことばは若年期には名士の文章を模倣することで上手としての評価を得ていた宋祁が、『唐書』の編修に従事した十年余りの間に数多くの文章を熟読した経験から、自分が五十歳以前に書いた他人を模倣するばかりの文章を恥じ、「文章というものは必ず自分で独立した一家を名のり、それで初めて不朽のものとなり得るのだ」と、文体の個性の重要性に気づいたことを述べる文脈のなかで表現されたものだが、ここでいう「一家」とは、学問・技芸等における独立したひとつの流派を指すものであり、例えば『晉書』巻七十五荀崧傳の上疏文中の、「向歆、漢之碩儒、猶父子各執一家、莫肯相從。（向・歆、漢の碩儒にして、猶ほ父子各おの一家を執り、相ひ從ふを肯ずること莫し。）」では、前漢の碩学である劉向・劉歆父子の学問が、単なる継承関係にあるのではなく、それぞれ独立した立場を採るものであったことを表している。この「一家」は「一家之言」「一家之學」等の表現を取り、独立した見解や論著、学問を表すこともある。また三國魏の曹丕「典論論文」（文選巻五十二　胡克家刻本）では、「融等已逝、唯幹著論、成一家言。（孔）融等已に逝き、唯だ（徐）幹のみ論を著し、一家の言を成す。）」と、「之」を含まない「一家言」という表現を用いているが、これも同様の例に含めることができるだろう。本稿で考察の対象としている宋祁は、これらから遥かに後の時代の人であるが、彼の言うところの、「夫文章必自名一家、然後可以傳不朽。」の「一家」も、これらの古い時代の例と同様の、独立したひとつの存在たるべしという意識を、文章制作において表現したものと考えることができよう。

ここで、さらにもうひとつ注意しておきたいのは、宋祁のこの感慨が『新唐書』を編修する過程で抱かれたものだということである。この「一家」あるいは「一家之言」という表現は、しばしば史書、特に正史の編修と関わって表現されることがあり、それは前漢の司馬遷による『史記』の編修にまで遡ることができる。司馬遷は「報任少卿書」（文選巻四十一　同）のなかで、『史記』の編修について次のように述べている。

僕竊不遜、近自託於無能之辭、網羅天下放失舊聞、略考其行事、綜其終始、稽其成敗興壞之紀、上計軒轅、下至于茲、爲十表、本紀十二、書八章、世家三十、列傳七十、凡百三十篇、亦欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言。

僕　不遜を竊み、近く自ら無能の辭に託し、天下に放失せる舊聞を網羅し、略ぼ其の行事を考へ、其の終始を綜べ、其の成敗興壞の紀を稽へ、上は軒轅を計り、下は茲に至り、十表、本紀十二、書八章、世家三十、列傳七十、凡そ百三十篇と爲し、亦た以て天人の際を究め、古今の變に通じ、一家の言を成さんと欲す。

司馬遷はここで、彼の『史記』という書物が、「天下に散らばり失われた昔から世間で聞き伝えられてきた話を網羅し、おおよそその事実を調べ、その初めから終わりまでをまとめ、その成功と失敗、盛んになることと衰えることの紀（いとぐち）を考え」ることにより、軒轅氏（黄

帝）からを現代に至るまでを著述の対象として、十表、本紀十二、書八章、世家三十、列傳七十、全およそ百三十篇の形に編修し、それによって「天と人との交わりについて究明し、古今の變化に通じて、独自の見識ある意見と」することを意図したものであると述べている。つまり、ここでの「一家之言」とは、収集された大量の資料をひとつにまとめ上げ、それらに対する検討と考察を進め、さらにその思索の成果をより高い段階に統一発展させた結果生まれたもの、ということができよう。『史記』巻一百三十「太史公自序」（中華書局本）にも、「凡百三十篇、五十二萬六千五百字、爲『太史公書』。序略、以拾遺補藝、成一家之言、厥協『六經』異傳、整齊百家雜語、藏之名山、副在京師、俟後世聖人君子。（凡そ百三十篇、五十二萬六千五百字、『太史公書』を爲す。序略、拾遺補藝するを以つて、一家の言を成す、厥れ『六經』の異傳に協ひ、百家の雑語を整齊す、之を名山に藏し、副は京師に在り、後世の聖人君子を俟つ。）」とあり、同様の意識を反映したものと思われる。

この司馬遷「報任少卿書」以降、「一家之學」「一家之言」等の言葉を史書の編修に関わって用いた例を多く見ることができる。次にその例をいくつか挙げてみよう。

（杜預）乃錯綜微言、著『春秋左氏經傳集解』、又參考衆家、謂之『釋例』、又作『盟會圖』『春秋長曆』、備成一家之學、至老乃成。

（『三國志』巻十六魏書杜恕傳「恕奏議論駮皆可觀、掇其切世大事著于篇。」宋・裴松之注所引『杜氏新書』　中華書局本）

（杜預）乃ち微言を錯綜し、『春秋左氏經傳集解』を著し、又た衆家を參考し、之を『釋例』と謂ひ、又た『盟會圖』『春秋長曆』を作り、備へて一家の學を成し、老うるに至りて乃ち成る。

（彭城王）義康大怒、左遷曄宣城太守。不得志、乃刪衆家『後漢書』爲一家之作。

（『宋書』巻六十九范曄傳　中華書局本）

（彭城王）義康　大ひに怒り、曄を宣城太守に左遷す。志を得ず、乃ち衆家の『後漢書』を刪して一家の作を爲す。

又採衆家『後漢』、考正同異、爲一家之書。

（『梁書』巻三十五蕭子顯傳　中華書局本）

又た衆家の『後漢』を採り、同異を考正して、一家の書を爲す。

何嘗不徵求異説、採摭羣言、然後能成一家、傳諸不朽。

（唐・劉知幾『史通』採撰　四部叢刊本）

何ぞ嘗て異説を徵求し、羣言を採摭して、然る後に能く一家を成し、諸を不朽に傳へざらんや。

これらの例ではいずれも、「微言を錯綜し」「衆家を參考し」、「衆家の『後漢書』を刪して」、「衆家の『後漢』を採り、同異を考正して」、また「異説を徵求し、羣言を採摭し」た上で、初めて「一家」の学問や著作（史書）が編修されたと述べていることに注意したい。これらの例においては、「一家」をなす史書は、『史記』の編修方法を継承し、先行して存在する数多くの説や著作に対して検討と考察を重ね、さらにその思索の成果をより高い段階に統一発展させるところに生み出されたもの、と説明されている。

すでに見たように、宋祁の「夫文章必自名一家、然後可以傳不朽。」という感慨は、『唐書』の編修に従事した十年余りの間に数多くの文章を熟読した経験から生じたものであったが、その感慨には、彼自身もそれに従事した、このような史書編修のあり方も意識されているのではな

いだろうか。

本稿でこれまでに検討してきたように、歐陽脩・宋祁の古文制作においては、韓愈以来の道統の継承としての意義を意識しつつも、むしろ、それまでの諸家をふまえつつ、それらを止揚した独創的な「自立之言」「一家之言」を生み出すことが強調されていた。韓愈らによる復興の後、一旦は廃れた古文は、この北宋期に歐陽脩らによって再び復興されたが、それは「古」や唐代の古文の単純な模倣をめざすものではなく、「古」からの儒教的理想の継承を前提としつつも、その文章表現においては、より自由な個性を発揮することを志向し、それはさらに次代以降の人々によって継承され、豊かな実りを生み出していったのではないだろうか。